

大僧正本多日生師著

聖語錄

上製金八十五錢 各郵税金八錢
特製金一圓卅錢

(殘本十數部あり申)
込順により發達す

法華經は佛教全藏を調整し融會して之を綜合統一せんが爲に起りたる聖教なり、日蓮上人は佛
教諸宗を教誡し指導して積極的統一を主唱せられたる導師なり、されば妙經及祖書に顯はれた
る教義はその旨致の深遠幽妙なるのみならず、その記述極めて多方面に亘れり、若し組織的
眼
光より考へを遂ぐるにあらざるばその真意を會得すること良に難しとなす、然るに従來はその
研究その布教その信仰その行業等に於て殆んどこの考察を逸却せるもの、如し
一この書は組織的の考察に資せんと欲して、法華經無量義經觀普賢經及祖書全集に就て、その要
文を類聚し編纂したるものなればこの書に依りて宗の内外に於ける研究者が、法華經及祖書に
對する公正なる考察を遂ぐるを得べし

目次

- 第一編 發心 感應 實在 神祕 懺悔 道義 推理 第二編 教相 内外對 權實對 絶對判
- 第三編 佛陀 三德 顯本 應現 體相 智慧 慈悲 功德 力用 權佛 餘論
- 第四編 教法 教法の信仰に約す 總持の信仰に約す 觀念の攝得に約す 本佛の三輪に約す
- 第五編 人身 通說 理具 事具 第六編 法界 通說 述門 本門 結歸 第七編 本尊 諸宗 佛陀の信仰に約す 教法總持觀念に約す 結歸本佛の三輪に約す 第八編 行法 總要 信仰 安心 道義 第九編 得益 總要 絶對の益 相對の益 第十編 批判 第十一編 警策 第十二編 調育 第十三編 祖傳

(東京 振替 口 一 九 番)

統一團

統一

第貳百拾四號

日蓮上人の警訓

汝後生をば餘處の事とのみ思ふあはれさ、我が身を思はぬ者かな、人間に生を受くる事は盲龜の浮木に値へるが如しとこそ佛は説き給ふ、恒沙の宿善を俱して希に受けたりし人間に、尙又得難き佛法に値ふ事を得たりしに、佛道修行をばなさず、夢幻の如くなる一旦の身を思ふて生涯空しく暮して、今かゝる憂目を見ることの愚さよ、汝さても佛法結縁をば何計りなしたりけん、説法などの聽聞をもせざりや

大正三年十二月十五日發行(一月十五日發行)



目次

日本國と日蓮上人

文學士 小林 一郎

現代人心の推移

東洋大學講師 中 島 德 藏

千葉懸布教の記

三 上 白 碧

活動史

東京雑誌記者會 加越巡教 房總 朽木 京都 大阪 神

戸 姫路 長州 各教報

日本國と日蓮聖人

文學士 小林 一郎

私は日蓮上人に就いて深い研究を致した事がありません、故にお話と申しても素より何も知らぬのでありますから却てお耻かしい次第であります、而し私は上人を敬慕すると云ふ點に於ては何人にも劣らぬ考て居ります、乍ら上人の教に就いては暗いので尊きお話を碎いてお話する事は出来ません、只自分の感じた事及び他から見聞しました事に就いてお話致さうと思ふのであります。

(1) 世の中の人は何れも自分自身を劣等に見る習慣がある、自分が心に大なる力を持って居るにも拘らず、自分で自分を蔑りて居るのである、吾人は心に大なる力を具へて居る事を自覺せなければならぬ、昔支那の小説に勿論小説であるから眞實であつたかどうかは判らな

いが、其の小説に唐の時代に玄宗皇帝は三千人の妃を召して居られた、而して其の妃が宮中に在りて互に美人となる様にとお化粧に餘念がない、それ毎十五人位づつお目見得するので、各々色々に工風して如何様に化粧したなら、帝の御氣に召さるるかと思つて互に美を競ふて居る、やがて化粧其の他凡ての仕度が出来上て拜謁を待ちつつある中に、唯一人化粧にも服装にも何にも構はずに居る、そこで他の同朋は不思議にして其理由を尋ねるが何とも返答がない、一室に入つて頻りに観音經を繰り返し／＼して讀て居る、すると纏て時刻が來ると先づ第一に御化粧も何もしない所の婦人を御寵愛になつた、他の御化粧をした所の婦人連は其意外なるに呆然として言ふ所なかつた、勿論此の小説の作家の意見は那邊にあつたかは判りませぬが、私の考へとしましては外形の美よりも心の奥底にある美が尤も尊いので、其の心の持方一つて血の廻りが違ふのであると思ふ、若し其が疑はしければ諸君が實際に就て考へれば判る事である、人間の心の力と曰ふ者は、外形の美よりも清らかなる心が外部に表れて來

れば、この外形の美は原倒されてしまふのである、其も年少の時は左様でもないが、長ずるに至つては非常な者である、此の小説の話は外形の美を去て奥底にある心の力を發達せしむる唯一の方法であると思ひます、又は外の話であるが、昔酒井幸一と云ふ人が在た、其人は性來美食を好む男であつたさうで、或時江戸に來て八百善か何處かて鯉の刺身とか汁とかを注文した、すると料理屋の主人は生憎お誂の鯉が少しばかりしかないのて、鯉を混ぜて料理して鯉に見せかけて膳部に上げた所、其の御客は鯉の部分だけ食べて鯉の處は残したと曰ふ、そこで主人は残した理由を聞くと自分は鯉を誂いたのであるから、其丈け食べたと曰てすまして居る、であるから料理屋も此には聯か赤面したと曰ふが、若し其が吾々で在たならば其の區別はつかぬ、酒井幸一と曰ふ人は一種の料理通とても曰ふ可きでありましよう、謂ゆる常識以上の者である、又錦繪を書くにもポットした色に見せるのは理窟では判らぬ、其は雜布のしぼり方一である相だが、其處が甚だ

六ツケ敷い、即ち以心傳心である、全體私は常識主義は好きな、常識を餘り固守すると世の中は馬鹿になるのである、判らないから教へないと曰ふ事は良くな、判らないから頭を下げて教を受くるのである、面を汝等の臍味なる智慧にては到底解する事能はずと曰て斥ける事は甚だ宜くない、人間を此の立場で律すから人間が益々薄弱になるのである、故に有難い法話を聞いても其は逆も吾々には出來ないと曰ふのが抑も人間の弱點である、誤解されては困るから斷りして置くが、私の宅へ折々色々な商人が品物を持って商法に來るが、私は其を退くるに、先づ對手の商人に充分に喋舌らせて置く、例へば小間物であるならば「何々の品は堅牢で品もよし貴婦人令嬢方の一般に御愛用になりませう」と曰ふた其時に、貴婦人令嬢方の使用する品物である左様な結構な品物は、吾々貧しき者には到底不向きであると曰て追返すが、世間の物質界に於ての衣食住等は身分相應の分限を守る事は必要である、徒に浮華輕薄に流るる事は吾人の慎しまねばならぬ

所である、物質界の方は右の様に身分相應を守る爲には吾等の財力の遠く及ばざる所であると曰て退けるは其當を得た事であるが、一段進て思想上の事に付ては、深遠にして宏大なる教理を受得したならば之を確持する事が肝である、人間の出發點は此處である、如何に日蓮上人を敬慕しても、此の思想を持たねば駄目である、謂ゆる日蓮上人が「若黨共二陣三陣打續け」と曰はれしは、弟子檀那のみに與へられたのではなくして、正しくは現代の吾々に與へられた御言であると思ふ、此は漫言でもない又誇る譯でもない、誇ると曰ふ事に就ては、私が嘗て本郷に居る頃、薪炭屋の息子で或る時商業會議所へ參觀に行くに付て、前掛けに鳥打と云ふスタイルでは體裁が悪いと曰つて、フロックコートを新調して威風堂々と氣取て往來を右往左往して得意満面で、而も天下に好男子我一人とすまして居たが、其等は自分で自分を低く見るから左様に嬉んで己惚するのである、ヨシ日本一の好男子と稱せられても己惚する事は不可である、日蓮上人が「愚者に讚め

られたるは第一の恥なり」と曰はれてあるが、成程考へて見るに、親が子供等に父さんは恰利だねと曰はれても少しも難有もなければ嬉しくもない、其は諸君も御同様であらうと思ふ、世間の人に譽められて嬉ぶ了見が増大するから益々此の世の中が常識を主とする様になる、明治の聖代に人間の誠の心が進たならば、此の世界を動かす事が出来る、御同様に此の精神を要求するのである、此の精神を弘むるに就ては、私は日蓮門下の檀信徒に拘らず國民として之を國中に弘めんければならぬ、「日蓮は房州邊海士が旃陀羅の子である」と曰ひ「又一方に於ては大梵天王にも超へたる者である」と曰ふ此意味合の大なる人格を敬慕する必要がある、吾人御同様は動もすればドーセと曰ふ言葉を使ふ用ゆるが、之を人間は使用してはいけない、御婦人は尤も多く此の都合のよい言葉を用ゆるが宜くない、例へば何か曰ふと直にドーセ女の事であるからと曰て、之を有耶無耶に弄る習慣がある、婦人は婦人としての範圍に於ての事は其の權限にあるものである、

斯様な事であるからして現代の状態を悲観するのである、今日も此會へ来る途中で、自働車に行合ふと直ぐ臭い煙と砂塵を浴びせ掛けられて憤慨しましたが、まあ〜と思てあきらめました、又程なく歩むと或る料理店の二階で紅裙達が盛に一座を賑かして居るのを見て、自分も其の境遇に接して見たいと思つた、けれども御存知の通りの體たらくて其望も叶はない、益々自分の不遇を考へて悲觀した、然し私の思附いて居る事は、世の中に於て此生存競争の激しき時に於て、どんな迫害に遇てもどんな逆境に陥ても心の力一つで斯様な事は何でもない、私の様な者でも此演壇に上りてお話しする事の出来るのも一つは上人の御庇護である、自宅に於ては斯様な事は出来ない、一家族の中では妻君程人を慰める事の上手な者はないと曰ふが、御同様に如何に妻君に慰められても斯様な事は出来ない、日蓮上人は其點に於ては誠に巧妙であらせられた、親を感化すると曰ふ事は中々出来ないが、上人は一切衆生を教化する前に、先づ父母を教化せられたのでありま

すが、吾々凡俗には左様な事は出来ないと思しませんが、出来ないといふのが抑も誤りて、畢竟自覺が足らないからである、其ならば其の自覺は如何様にして起るかといふ事が問題である、が此は六ツケしい事ではない、自分の力で起るのである、力は慈悲心より起るのである、日蓮上人は學問上に於ては傳教天台にも劣るが、此の慈悲心に於ては傳教天台龍樹迦葉にも勝れて居ると仰せられた、又支那に於て老子は「慈ナルガ故ニ勇ナリ」と曰ふ事を曰はれて居るが、誠に此間の消息は結構である、此に於て自分の見聞した事をお話しするが昔文政年間演野則幸と曰ふ人が在つた、其の人の父は則繁と曰て非常に上手な彫刻師で在つた、其の名人の彫刻師の倅の則幸は、至て無器用で在たさうで、父の歿後、或時倅則幸が父の業を繼て、何か彫り物を拵へて父の友人が知人で在た所の者で、芝區に住んで居る商人の許へ行つて、其品を買取て貰ひたい望で訪ねて行つて品物を見せると、商人が見て曰ふには、あれほどの名刻師の倅にも拘らず之の刻物の不出來なのに

驚いて其の倅に曰に、君は斯様な者を拵へて賣らうとしても此の出来工合では誰も買手が無い、依て何か商法替をするか、一層死んでしまつたらと曰て勸告した、すると倅則幸其儘自宅へ戻りて母に其の一任一任を話した、所が母親も非常に死ぬ事に付ては賛同して呉れた、則幸も此には殆ど困たけれども仕方がない、死ぬと覺悟した上は死ぬが、元來無器用の則幸であるから何から何迄無器用で死ぬ方法を知らない、尤も武士の子で有たら切腹をするであらうが、さすが町人丈で开んな事は知らない、て母親に死ぬ方法を尋ねた、而し母親も困たがやがて一番手軽な方法を考へて倅に教へた、其は臺所の梁へ紐を掛けて縊死の方法を教へた、そこで悉皆死ぬ用意が出来て將に死んとする時に、母親が留て曰ふには、お前死ぬのは何日でも出来るから死ぬ前に形見として今一度何か彫り物を拵へてはと勧めた、すると元來親孝行の倅であるから其儘母の曰ふ事を聞いて彫る事になつて、或る一室に籠つて熱心に作業した、而も四週間を費した、母親も其四週間の間熱

心に觀音經を讀むて居た、纏て四週間経ちましたら出来上つた、母の曰ふには、死出の名残に拵たものであるから今一度芝の商人の許へ行つてお目に掛けると曰た、すると則幸は早速仕度をして出やうとする時に、母が曰には、お前長い間作業して身體も衰へて居るから下駄では危いから草履を履いて行けと曰て新しい草履を履かしてやつた、やがて芝の商人の許へ着いた、そこで名残りに拵へた品物を見せると、商人驚て暫くの間は無言で在た、暫くして此は君の自製では無からうと曰て再三尋ねた、けれども則幸は全く四週間を費して名残りに拵へたのであるから虚偽でない實際である事を述べた、すると商人が鑑定の結果君が此程に巧みに出来るならば何も死ぬには及ばない、爾今精を出して拵へるが宜しと曰て兎に角歸宅させた、則幸は大喜びに喜んで早く歸て母に其旨告げようと急いで歸宅すると、豈計らんや自分が死ぬ爲に梁へ掛けた縊で留守中に母が縊死を遂げて最早不歸の人となつてしまつた、故に則幸は益々奮勵して手腕を鍛へて遂に彫刻師

として全國に其名を傳へる事が出来たと曰ふ事があり
 ますが、誠に之は好き模範教訓でありまして、愛が人
 間の尤も肝要な所であると思ひます、之は母親の慈
 悲心と又則幸の孝とが合體した爲である、如何に母親
 が慈悲を垂れても受ける子供が之を受持しなければ其
 效はない、日蓮上人が「日本國一切衆生の苦は悉く日
 蓮一人の苦なり」との仰せが在ても、之を受ける吾々
 が用ひなかつたならば、教の咎ては無くして吾々の罪
 である、上人が吾一人の苦である、日本の眼目である
 と曰はれた、此等は皆大慈悲心から起つたのである、
 此の深遠なる慈悲心を信仰して吾々は、大正年間に於
 て發揚するの時機である、吾が日本帝國は如何なる使
 命を持って居るかと曰ふ事は論究を要しない、國民が過
 去數千年の歴史を以て誇つて居るのは宜くない、皇統
 連綿として居る事は世界に勝れて居るが、古來に於て
 は臣にして君を弑し奉つる様な大逆罪を犯した事もあ
 る、今迄の日本は日本の國中に於ては勝れて居るが、
 世界には未だ勝れて居ない、現代の吾々國民は皇室を

中心として進まなければならぬ、世界に卓越せる國
 家を造らねばならぬ、今迄の日本は恰度懐る育ちの坊
 やの様である、いくらおとなしくとも懐育ちの坊や
 ては何の役にも立たない、此の子と彼の子と相對して
 こちらがおとなしくてこちらがおとなしくないと曰ふ
 のではいけない、超越しておとなしいのでなくてはい
 けない、今の時に日本國民が誇るのは未だ少し早い、
 今は恰度世界列國から試みられる時である、試みられ
 ない内から誇るのは本意でない、國民は誇るどころで
 ない、寧ろ各人の本來具備して居る心の玉を磨いて光
 ある國民となり、進んでは光輝赫々たる國たらしめて此
 を全世界に卓越した國とせなければならぬ、吾人の
 自覺一つで此を成し遂げる事が出来るのである、日蓮
 上人の教を鎌倉時代の教と思ふのは尤も宜しくない、
 又愚である、現代の様な白法隱没三毒強盛の此時代に
 於て最大必要である、此の白法隱没の時代に於て、調
 機調養した佛陀の徳が表れるのである、上人の教は吾
 人に與へられたのである、御遺文にある事を只讀む文

も眞價を顯すのであると信ずるのであります



では何の役にも立たない、御遺文を拜讀したならば此
 を色讀して實際に行はなくてはいけない、支那の國の
 一部落ては警官でありながら、時に依ては泥棒になり
 そうして又警官となつて警戒すると曰ふが随分奇なる
 事である、其の様に日蓮上人の教義を味ひながら又乖
 反した事をする人がある、其てはいけない、人民を警
 めて警護する其の職にありながら不正の事を爲すと曰
 ふは實に言語同斷である、道にある者は大に留意すべ
 き事であると思ふ

現代の世の中の様に憤慨に憤慨を重ね迫害に害迫を重
 ねると云ふ時代には、どししても國民全部が擧て思想
 上に日蓮主義の一大徳教を奉持して、此等の擣憤を慰
 安し、内には國家の隆盛を祈り、外には全世界に卓越
 せる光輝ある日東帝國となし、此の澄澗たる思想を基
 礎として進まなければならぬ、此の時に於て人間が
 奮起しなかつたならば人間は死人や薬人形と同様であ
 る、人間としての價値がない、此の時期に於て日蓮上
 人の仰せられし「我日本の柱とならん」との警句が尤

日蓮上人云く

夫外典三千餘卷には忠孝の二字を骨とし。内

典五千餘卷には孝養を眼とせり。不孝の者は

日月光を惜み地神瞋をなすと見えて候

現代人心の推移

東洋大學講師 中島 徳藏

今日は現代人心の推移といふ題を出して置きました
が、其に就いて宗教並に道徳に關する實際問題を語つて見たいと思ふのであります、申すまでもなく御同様に吾々は非常に混亂せる時代に立つて居るのであります、やれ實子が父を斬つたの、夫が妻を殺したのといふ様な悲惨なる出来事は激しく起つて來て居るのであります、そこで社會は腐敗墮落せりといふ聲は毎日耳にたこが出来る程聞くのであります、扱てこんな變化の激しい油断のならない様な時代は、如何にしてなつて來たのであるか、一言にして現代の社會は病氣に罹つて居るのであります、此病氣は何といふ病氣で、又如何にしてこんな病氣が起つて來たのであらうか、今日私の述べんとする處は出来るだけ此病氣を解剖して、診察をやつて見やうと思ふのであります

現代は腐敗墮落した、現代は悲觀すべき世の中であ

るなどといふ事は、常人の嘖語であつて、耳新しく聞くまでもない事である、徳川時代より明治となり大正となつたといふても、如何にしてそんなに俄に社會が病的になつたのであるか、到底受け取れない様であるが、そこにはそこがあるのであります、西を向ても東を向てもチョンマゲ頭より外に見るものがなくて、日本といふ小さい島國に立籠つて居たものが、黒船と共に門戸を開放して一躍世界の舞臺に乗り出した處は恰度深窓の佳人が寒風膚を裂く様な寒空に裸で飛び出した様なもので、直ぐに風を引かなければならぬのと同じことあります、日本といふ小娘が今迄は只一人奥の一間に斗り閉ぢ籠つて居たものが、急に裸で世界といふ廣い世間の眞只中に飛び出したものでありますから、サー何處の方へ向いたらよいのやらさつぱり譯がわからない様なものであります、之は只一つの譬であります、然らば國が世界といふ廣い世間に飛び出したなら、それが何故病氣に罹らなければならぬのであるか、早い處が、日本の日本であつた時代には吞

氣なもので、大した煩もなかつたが、世界的になつたらあゝあれも欲しい、是も欲しいといふ慾が出たといふのと同じ問題だ、恰度田舎ものが東京へ出て來て勤工場へても這入ると、あれも欲しい、是も欲しいといふ様になるのと同じことで、一概に世界といふ都を見せたものであるから、いつまでも小さい田舎島は見ぢや居られない、日本も少しや大きい陸地に上つて見たい、布哇も欲しいし、ヒッソピンも欲しい、間がよけりや米國當りもやつつけろといふ様になつて來たから、日本も今までの日本とは少しは異つて來た

國民一般の頭の中にゾート慾心といふやつが頭を持ち上げてきて、何でも日本もここで奮闘一番しなければならん、吾々七千萬の同胞は日本の天皇陛下を押立てて世界の天皇陛下としなければならんといふ處の意氣込みは有ゆる方面に頭を持ち上げて來て、政治にも文學にも商工業にも美術にも、天下百般の諸現象は僅に三四十年にして忽ち面目を一新する様になつて來た、斯う云ふ時代の國民の狼狽さ加減といふたら並み

大底ぢやない、何事でもあせつて居るから身體が三つあつても四つあつても足る筈がない、田舎ものが勤工場へ入ると、あれも欲しい、是も欲しいと皆買ひ上げて終りたいが、さて懷の中には五厘丸がある斗りたといふ様では、鐵砲弾の一つ位なら買へるかも知れぬが、とても足らぬ相にもな

今の日本の懷中といふた處で百十七億位のもので、世界の國に比べると、私立の預金銀行の財産位のものでお話にならない、國の上からいつても、金の上からいつても、勢力の上からいつても、物質の上からは到底較べものにならない、然し日本は清露の大戦に大勝を博したが、ここにもやはりそこがあるので物質已上の力がある、兎も角も日本は此れだけの物質を持ってドーシテも世界に拮抗して進まなければならぬ場合に立ち至つて居る、斯る時代にある國民は最も注意を要する時代であつて、思想の上にも動作の上にも其他諸般の上に非常なる變化を來して居るものである

徳川三百年無事泰平な時代の人は、何處となく平和

なドツシリとしたをちつきの顔をして居たもので、あるが、現代人にはそんな顔付をして居る人は居ない、大概神経過敏なヒステリー式の顔付をして居るもの斗りである、徳川時代から繰越して來られたお年寄の仲間の中にはまだ鮮なからずあるが、近頃の人間には絶てない、借家をすりや店賃が滞るし、子は出來る、學校へは遣らなけりやならんし、其内には嫁には遣らなければならん、遣り繰り算談はしなけりやならんが仲々甘くはいかない、それかといふて喰ふことも止めて置く譯にはいかない、殆んど人間が當惑して終つてモ、何か骨が折れなくて甘い儲け口はないか知らんといふ様になつて來て、何物かを求めんとして居る

文學士も一人や二人の間は平和なものだが多數になると仲々容易に甘い月給にもありつけない、頭丈けは大きくなつたが手足は小さくて歩けないといふ人物が此頃大分出來て居る、こんな時代に於てはどんなことが起つて來るか、勢ひ人は輕薄になる、人はどうてもよい、先づ自分がうまくやつていけなければならぬと

たりする、見られりや誰でもないや奴だとは見られたいくない、成るべく好く見られたいといふのが人情だ、殊に歳の若い娘子などに三越白木屋と見せてあるいちや猶に饜節だ、ドーシテも虚榮に流れずに居られる筈がない

翻つて自分の境遇はどうであるか、到底此欲望を満足せしめる丈けの勢力がない、といふて此はやる心馬を引きとめて、思ひ切ることの出來ないのが此虚榮心である、今少しく適切に云へば、誰にてもホメラレタイといふのである、田舎の機に味噌屋へ入丁、豆腐屋へ一里といつた様な處に生活すれば、見得も體裁もあつたものでない、従つて虚榮心などは薬にしたくも起つて來ないが、東京當りては仲々さうはいかない

そこで着物は何處でも眺へ放題、若し金が少しあるとすれば護謄輪の自州車で、都大路を飛び歩いて、後を振り返つて何處のサムシングだらうと見てもらはない何だか存在の意義がない様だ、といふのは何處の奥様を叩いても近頃流行の理想なんだ、處が田舎でこ

いふ風に傾いて來る、又人の前に出るに服裝が悪いと人に馬鹿にせられる、少々借金は出來てもなり丈けは借金に替へられないといふ様になつて、表面丈けて世間を通つて行かうといふ虚榮心といふ奴が段々強くなつて來る、之は自分の力がないからで、實際實力のあるものはさう服裝や見得を飾るものでない、田舎の人にはこんな人が澤山ある、煮出した様な腹巻でこそあるけれど中實は二三百圓も入つて居るから懐は暖いものだ、真黒くなつた單衣一枚を着て居ても、三越の前であらうが何處であらうが平氣で立て居る、買はふと思へばいつても買へるから平氣なものだ、其僻おつたまげて讚めちや居るけれども仲々買はない、こんなものをもつたいたいといふて居る、イクラ番頭に馬鹿にせられても驚かない、是等は皆實際腹の中に實力があるからで、虚榮なんといふことは丸切り知らない、が然し今日時勢の潮流は日益に斯ういふ人物を滅殺して行つて居る、東京當りては一寸門口に出ても、滿盤飾の美人は右往左往する、従つてお互に見たり見られ

んなことをやろうものなら、オヤ田吾作の娘は氣が狂いやあしないかホントニ困つたもんだナといふことにせられてから、遇々飛び出して亦引つ込んで終ふのである、素質がない譯ではないけれども、あたりの境遇が之を許さないからだ

人の虚榮心といふ奴は出會ふ處の人の眼球に比例して増すものであると定義をすることが出来る、此定義は何人も否定することは出來ないのであつて、夫婦の間なればイクラ見合つて見た處で、眼球の数は四つしかないから、大した問題も仕出かすことはないけれども、一寸隣の人が一人來ると早や之が異つて來る、襟をつくらうやら目附きが異つて來るやら言葉まで俄に改つてヨソイキの聲を出して來るやら、段々化粧を施して來て、之が次第に繁華な町へ出て、東京へ來るに従つて眼球の数も増へて來るし虚榮心も盛になつて來るのである

始は素朴な田舎といはれて居た處も、交通機關の頻繁になるに従ひ、汽車の着く度び毎に眼球の数はふへ

て来るし、肥料の香は香水の香に變つて来る、そこには畏るべき虚榮心が根城を擴張してくる様になるのである、吾々は何といふてもバタ臭い香いと虚榮心とは餘程深い因縁があることは思はざるを得ないのである。

凡そ人の心といふものは、用ゆる程其強さを益してくるものでありまして、おさんどの様に朝から晩まで臺所の隅で喰ふこと斗りを考へて居れば大した名譽心も起らないのであるが、出合ふ眼球が一つづつ殖へて来るに従つてホメラレタイといふ精神を生じてくるので、一寸時計を持つにしても天婦羅でもよいから金時計がよくなる、此頃は金指環でも壹錢五厘で買へる様になつたから、權も八も金づくめて、私の家の女中でも外へ出る時には金の指環を指して行くが、何處で買つたかと尋ねると、夜店で買つたさうである、門をさへ出て終へば女中だといふことは知つて居るものは一人もないから、何處の令嬢か知らんと、若い男なんざ一寸振り返つて見るんだから、御當人には是が又無上の喜びなんて、天へも昇様にうれしいので、居ても

立つても居られない、馬肉屋へ上るにしても金色さへピカつかせて居れば、女中がズツト變つてくるからたまらない、天婦羅でも何でもよいから、此節は金色をピカつかせないといふ巾がきかないといふ時世になつて来て居る。

時勢に斯ういふ風が吹けば吹くほど、之を満足させる處の金がほしくなる、處が此金といふ奴仲々自由にならんもので、世間の問題は十中八九迄此金に起因して居るものが多い様である、ここに又人間といふものは面白いもので、金が出来ると割合に外のなりなどは構はなくなるものである、金があればある程、喰ふ物も喰はずに無暗にたまるのが嬉しいといふ奇體な性分の人もあるが、然し之と反對に、金がなくて虚榮心丈あるのになると、なけりやないほど虚榮心が高くなつて来て、胸の處までせき上げてくるものもある、人心の作用といふものは意外に極端に走るものであつて、斯ふなるとモ一金さへあれば思ふ存分のが出来るので、學問も出来るが、金がなくつちやといふこと

になつて、愈々虚榮心と金の問題になつてくるが、併し金といふものが、果してどれ程の價値があるものであるか、假に此に一人の人物天才ありとすれば、三井岩崎の倉を抛げ出して、現金で出すから買ひたいといふても、之ばかりは買ふことは出来ないのである。

人物學識といふものは、何ものを以ても買ふことは出来ないのだ、大底のものは金と權威さへあれば自由のさく世の中ではあるけれども、學識だけは金と權威でも如何ともすることは出来ないのである、裏だなの息子でも勉強さへすれば、三井岩崎已上の人物にもなることが出来るけれども、いかに三井岩崎の財産を以てしても、其子を裏だなの子と同じ様な奮勵努力をする勉強家に爲様としても、必ず立派な人物にするといふことは出来ない、却つて金のあつたが爲に之が邪魔になつて、あつたら大事の子寶を放蕩息子にして終ふたは随分少くない、そうして見ると、三井岩崎の子でも、裏店の子でも勉強をしなければ、學殖と人格を得ることは斷じて出来ないといふことは同一である、處

が此虚榮心といふ奴はどうであるか、決して修養も學識もなんにも入らない、只金さへあれば自由勝手に出来るものである、一も二もなく、金指環を嵌め、金時計を持つてみたいといふのであるから、金さへあれば誰にでも出来ることで、貧乏人の子でも何んでも、自働車にでも乗つて飛んで歩けば、満都の有象無象をヤンヤ／＼と騒がせる位のことは何でもないことだ、斯うなつて見ると、裏店の子も、三井岩崎の子も、さう大した異いはない、只金の有る無しだ、有象無象に騒がれて、虚榮心を満足さすとささないとは、只金の有ると無いといふことになる、金さへありやといふ氣の起つて来るのも、あながち無理でない、女の方には殊に激しいが、男の方でも人情、やつて見たいと思はないでもない、お互に斯ういふ實感はあるだらう。

然らば此人間開闢已來ある虚榮心は、現代どういふ様になつて居るかといふと、自然僥倖、即ち間のよいといふことを冀ふ様になつて来るが、世の中は仲々斯ういふ甘い僥倖であつて、正直な道を辿つて居ちや、

一度に大金が入ってくるなんといふことは、容易にぶつかるものでない、又實際吾々が今日を生活して行くには決して大金のかかるものでない、寧ろ事實は大金を費す處には弊害を生じて居る、けれども吾々此僥倖心あるを如何せん

百圓の月給を取つて見た處で、一年に千二百圓十年に一萬二千圓だ、喰ふものも喰はずに、利子まで積み立てて見た處で、其金額が何程になる、實に徹々たるものである、只資産だけでも幾百萬といふ様な身の上は到底此世ぢや得られ相にもない、況んや人生古來七十稀なりだ、小百圓の月給にありつくには、やつぱり小三十年懸る、此節ではまご／＼して居ちや百年かかつても吾々の理想は實現して來相にもない、そこで勢ひ一時に金の入つて來る様な、賭博的相場的の精神を生じ來らざるを得ない、其結果がどんなものになるかといへば、毎々諸君が新聞で見て居る通りの人生が描き出されて來るのだ、月俸七十圓も取る立派な官吏の奥襟が、懐には二三十圓も持つて居りながら、僅なもの

は上手ですネーとやられると、鶴の一聲でズット眞正直に受けて終つて、心からうれしくて堪らない、とそゑさんなどは其一人であつた

サ、其信じした結果は如何なるか、不義の子とはいひ乍らも可愛い子までもありながら、絞首臺上の露と消へなければならん様な恐ろしき罪惡も作るのである歌に新聞に誑はれて果ては罪なき愛子にまでも、忍びぬ耻を残して逝かなければならん、諺にも親はなくとも子は育つて、意外にそんな子は賢いもので、高等女學校でも優等で卒業すれば、アリヤーマー護の子だらうと兎角世間は口の五月蠅もので、詮索をしたがるものであるが、斯ういふ時になつて知つた娘の心の中は如何であらう、又次第に年を取つてくる母なる人の斷腸悔悟の胸中は、肉を切るよりも切なるものがあるであらう、母は年波と共に慚愧の晴を喰み、子は亦成功と共に益々無情を恨む、一端の禍が萬年の疵となるとは眞に畏るべきものではあるまいか、併し誰でも始より此自覺のある人はない、セキスピヤが「虛榮心程

に目かくれて萬引をするに至つては、人心も亦淺聞聾哉である、こんな夫人になつては百圓が二百圓あつても足らないのであつて、蠅蝮町へ心を入れて居る男子も矢張之と同じ系統なのである、數百萬と指を折られた名家でありながら、忽ちにして祖先傳來の田地田畑を措つて終つたといふ話は随分珍らしくないことだ、一方は人のものを只取る方だが、他の方は骨を折つて自分のものをやる方なんて、どつちにしても皆是れ虛榮心の産物であることは争はれない

斯くしても尙僥倖を冀ふ精神は日に増し滔々として流れて居るのである、英國の有名な詩人セキスピヤは「虛榮心程自己の成り行きを知らざるものなし」といふて居るのでありますが、彼等姦男三郎の問題でも矢張此虛榮心といふ奴が、迷ひの第一歩を作らせたものであります、男子にも無論あるが、殊に著しい婦女子は、之を利用せられることが尠くない、さなくしてさへ、茶でも花でも音楽でも、自分免許で鼻高か／＼になつて居る矢ささへ、一寸若い男にてもホントに貴嬢

自己の成り行きを知らざるものなし」と素破袂た處は實に人生萬古の格言である、處が人情の弱點で虛榮心に蹂躪せられて悔を残して後に、始めて眼が醒る人が少くない、そして此虛榮心が盛んな社會ほど多くの失敗者を出すのだ、晨に業を起して夕に家産を閉ぢるといふ悲惨な運命の風が吹きさすぶのである、而して高い峯から俄かに谷底へ落ちた様に、成功熱に血迷はされて、激しい變化を咒ふ者の多いことは今の日本ほど多い時代は萬古に未だ曾てない、私は此頃外へ出て、淺草公園は申すまでもなく、銀座でも神田でも、東京に至る處に易者の數の多くなつたことを見て驚く、甚しいことは縁日の晩に軒を並べて居るのに驚く、而も亦是に行く人がどうであるかといふと、上下の階級を通りて行くのであるから、愈以て驚くの外はない、モ、何か事が起ると、五里霧中になつて易者の處へかけ込むて、相當に是が繁昌して行く處を見ると、如何に現代の人間が、薄氷の石の様になつて居るかが思ひやられるのである、斯んな迷信の流行する社會ほど、人心

の煩悶は多いのである、其煩悶の結果は何處へ行くかといふと、一つ宗教を聞いて見様と云ふので佛陀の福音に來る人もあるが、是等は最も温順な方であるが、此の外にまた二道ある、氣の弱い連中になると、考へて見りや浮世は夢だなんて、自分の禪で死なうなんといふものもあるが、又一方氣の強いものになると社會主義などを唱へるのである、社會共產なんといふことを唱へて見た處で自然の状態に反したことは到底人世には永存するものでない、又近來自暴自棄を起すものが多い様だが、やけては人世は治さまりがつかないのだ、それから又惡徒のする仕事が非常に慘酷になつて思ひ切つたことをやることは、近頃餘ほど甚しい、即ち三人斬五人斬といふて世間を騒がして居るが、其仕事が如何にも慘忍で又其罪惡が常に一步／＼新しき方法を取つて進んでくる處は、現代智識の惡化したものと思はれる。

私共田舎の方へ講習會に參ることがありますが、ズット北の方へ行くと、宿屋で雨戸を閉めない處がある、

矢張人間は新聞に書かれ、世間から立てられたからには身錢も厭はぬといふ方、即ちオダテのさく方の人が學校の爲になり、村の爲に寺院の爲になるのである、是が又自己を全ふする所以であり、社會を益する眞の人間と云ふべきで、此點に於て滔々たる虛榮心のある此現代は非常に有望である、此虛榮心のある方がよいので、尙未だ大に發達せんとする餘裕があるのである、そこで吾々は大に修養をしなければならん、只頭丈けが大きくなる計りては片輪ものだ、釣合の取れぬものは倒れるといふ原則がある以上は、手足の平衡を保つ爲には大に修養をしなければならぬ、國家としても個人としても何時赤裸にして何處へ抛り出されても、腕一本腰一本で喰つて行ける位のことは出来なければならぬ、一人前のことは何を持って來てもやつてのけることの出来る丈の自覺と修養は積んで居らなければならん、金の利子で飯を喰つて行く様な人間はお終いだ、裸一貫で外へ抛り出されては到底男一匹の生活はして行くことは出来ない、アングロサクソン、シユーベッ

女中に聞くと、へー泥棒なんといふものがありますかネーといふ様な處もあつたが、それが汽車の線路が一本も通る様になると、段々自分の家でありながら藁屋なんどはやぼくたいと嫌つて見たり、田舎娘もそろ／＼とすれつからしになつて來る、出ても入つても墓口を握りつぶして居なくつちや安心のならないといふ時代は、實際吾人の眼前に迫つて居る現代の事實なんだ、そこで

社會の一角からは、現代の人心は腐敗墮落せりといふ聲も起つて來るのである、が然し此言葉を信じて全然認めるといふことは出来ないにしても餘ほど此事實は存在して居る、と同時に又此中にも亦立派な考を持つて居る人が澤山ある、慥かに虛榮心は盛に熱を上げて居るが、併し又よく考へて見ると、矢張此人間の虛榮心のある方がまづ話せるんだ、打つても叩いても、握つた金は離さない方は地獄に行くには都合が好いかも知れないが、社會が公共がと何といつてもマルデ石の様になつて終ふ様になる奴になつてはモ一駄目だ、

オリチーの中に、大學の學生が裸で世界旅行を企てたことを書てあるが、仲々面白い、學生は皆赤裸になつて出發をする、中には先づ湯屋へ飛び込んで、三助になり三助の禪を買つて其身仕度をする處などは非常に面白い、それでも泥棒をしたのだから少しも耻る處はない、或時は路上に雄辯を揮ひ、或時は書を著し、車夫となり、教師となり、船頭となり、労働者となり、種々様々なることをしながら旅行をして行く處は實に珍妙な一例ではあるが、現代の男女は皆此自覺がなければならん、恰度此本の出来た時には印度まで行つて居る處であつたが、現代は是てなければ切り抜けて行くことは出来ない。

華族の奥様が英國ではレデイス、セツトルメントといふ様なものを作つて、傳染病患者の家庭に入つて仕事を手傳ひ、衛生術を實行して行く團體があるが、華族の奥様ともいはれる身分の人が女の腕でこんな立派な仕事をして居る、ヘボな男などは足許へも立寄ることには出来ない様な此堂々たる自覺がある、日本人は

此等の勇氣ある處は大に學ばなければならん、眞に是丈の自覺のある奥様がどれ丈ある、頭斗り大きくて手足と釣合ないのが多數だ、只虚榮の熱斗り高くなつて、之を善良に導いて行く處の修養といふ精神が缺乏して居る處に現代病は生じて居るのである。

近い例が、小學校でも高等女學校でも行つて見玉へ、何處の華族の御令嬢かと思はれる様な着物を着て居る、蝙蝠傘でも七八圓もする様な贅澤なものをさして居る、之で現代人の力のない處と意志の薄弱な處が直ぐに分るのである、何處の家でも贅澤を好いとは思はないであろ、娘は仲々さうは思ふて居ない、學校のお友達が七圓の蝙蝠傘をさして居たから、お母さん私八圓のがほしいとやつて来る、米が高い位のことでは知て居るけれども、ツイ可愛い娘にせがまされると萬更叱るにも忍びない、仕様がなないネーお前はとは云ふもののドーモ時世が時勢だから、などと云ひ乍ら買つてやる、この時勢に支配せられるといふ奴、是が第一悪い、意志の弱い處である、娘が悪いのぢやない、親

が悪い、他家はドーデあつても自家ではいけませんといへる母親がない、可愛い子にせがまれてもNOと言へる賢婦人が一人もない、是は現代の夫人に活ける哲學、宗教、道徳がないからである。

私は跡見女學校で、前の文部大臣牧野さんの娘御を知つて居るのでありますが、まだ十五六位しかならぬ、此方は一年中一枚の着物を着て來られる、少しも服装を構はない、夏になると單衣物にするし、冬になると裏をつけて袷にして着て居られる、いつも同じ着物を着て來られるので、不思議に思ふて尋ねて見ると此母親さんが仲々偉い方で、三島氏の御娘子である相であるが、流石にちやんと此虚榮心の成りゆきを知つて居られる、子女の教育は母にあるので、母が弱いが爲に、男三郎の様なものを生じ、腐敗女學生を生ずるのである、之其罪は母親にありといはなければならぬ、罪を或は學校教育に歸するものがあるけれども、河といふても子女教育の主體となる母親に充分の責任があるのである。

或る夫人になると湯にいくに縮緬の羽織を着て辨慶の七つ道具ほど色々なものを持つて出かけるのがあつる、又一寸出るにも下女を四五人もつれて出る奥様があるが愚の骨頂だ、英國の有名な伯爵の夫人が日本へ來て帝國ホテルへ宿つた時に、在英中に世話になつた人が訪問をした、處が伯の夫人はブツ／＼としてある白い服を着て居るし、持つて來て居る傘を見ると男物の古物を持つて來て居るので驚いた、遙々英國から觀光に來られたのだから、定めし立派に美しく飾つて來られたのだらうと思ふて行つた處が意外であつたので、餘り不思議なので尋ねた、すると夫人の答はさつぱりしたものだ、夜會か何處かへ行くのなれば、お金のかかつたのも着ていきますが、旅へ出るにはモト風雨を凌ぐことが出來れば充分です、服装なんといふものは其時々々に適當なものを用品れば澤山ですといつた相であるが、こんな夫人は一寸少ない、近頃の様に無暗に風采計りを飾る傾向といふものは、馬鹿でなければ、深遠なる考への足ならい爲であると思ふ、ドー

モ現代は人間が薄べらになつて表面丈けの人が出來て來て居る様に思はれる、現代日本の發展の曙光は此短所にあるのであるが、茲には又現代の病根を醸して居るのである、然らば

此病弊を治するには如何したなればよいので、あるかといふと、それほど六ヶ敷ものでもない、吾人日常着物を着ること、道を往くこと、食物を喰ふ上に就て周到なる考へを持つて行きさへすれば、其處に聽て深遠なる哲學も、宗教も、道徳もあるのであらうと思ふのであり、此正しき智識を與へるより外に現代の病根を醫する道はないと思ふ、兎に角、現代は哲學的人を要求して居るのであります、同じ白きものなれば純白となり、同じ堅きものなれば更に金鐵よりも堅きものとならなければならぬのであります。

論語の中に「堅きを曰はずや磨けども礪るがず」「白きを曰はずや涅して細からず」即ち堅い金は砥石を以て磨いても減らない、純白なものは黒い液汁で染めやうとしても染まらないといふので、聖人は何處へ往つ

ても悪化しないといふてあるが、現代は何を置いても先づ此現代の素質に一會艶をつけて行かなければならん、老年寄も大に御注意をしてもらはなければならんが、殊に青年は常に考へを此處に持つて道徳宗教の活ける力を取りて修養し、一夫人に劣らぬ様に、大なる自覺を起して社會に立たれんことを希望するのであり



日蓮上人云く

何となくとも一度の死は一定也、色ばし悪く
て人に笑はれさせ給よ

とは容易の業であらう吾等不敏なりと雖籍を日蓮門下に列する上は所謂「努々退く勿れ」「一生空しく過ごして萬歳悔ゆる勿れ」との警訓を證し南船北馬西又東この道の爲に其天分を果さねばならぬされば我教團所屬の寺院は房州一國を擧げて僅かに館山町に一ヶ寺を有するのみではあるが凜乎たる精神的訓練を施さねば教田荒蕪して活氣消耗するに至るべく我等はこの精神と地方風教改善のために純善の信仰を植へ付けばやと思ひ二十日午前七時東京靈岸島より二等船客となつて午後一時館山町に着いた予等は總代人の出迎をうけ本蓮寺に着くや大本尊の寶前に拜跪して至誠の渴仰を捧げ少談休憩の後館山公園や城山などに散策を試み歸來道の爲に勵むべく聖訓を拜讀して眠りに就いた二十一日午後二時夏目布教師は活ける信仰に就て講述し予は日蓮上人の人格的靈光に關して各方面より崇高なる人格を説き此の大人格を有する縣民は光榮に感奮して一段の奮勵すべきを誨へ山根布教師は日蓮上人の教義概要に就て折伏的意氣を傳へ力ある印象を與へて午後六時

千葉縣布教の記

三 上 白 碧

房州の地は天照大神のみくりやにして大偉人日蓮の降誕せられた靈地であるされば我國史上最高有要の地位にして悉く偉人日蓮の大人格の靈氣に觸れて人生の眞意を證得せなければならぬ特に千葉縣民は斯かる大偉人を有するを光榮とし誇りとし子孫としての自覺を喚び起して其面目を發揮するに努めねばならぬそれは日蓮宗徒たるのと否とを問はず此の光榮を擔へる縣民は公正の見地に起つて偉人日蓮の靈格に渴仰の至誠を捧げ健全なる美風と崇高なる人格を作り上げねばならぬが悲哉この根本靈地たる房州の地には濼濼として活ける大日蓮の生氣信條は久しく暗雲の裡に包まれて光明を見出すことを得ざりし現狀である然れども是は之れ大義宣傳の力を缺けるが爲にして縣民先天の內的方面に於ては昔しより大靈聲を存して無限に靈光を輝かすべき素質を有して居ることと言ふまでもない故に啓導其宜しきを得るならば幾多の小日蓮的人物を産み出すこ

閉會を告げ次いで午後七時上人の大靈格の寶前に於て清き法式を擧げ八時より晝間の講演を續行し予は精神修養の必要より偉人日蓮の靈府に入るべしと説き山根師は開顯包容主義より説き起して統一の本義に及び卓越せる日蓮主義を傳へ夏目師の懇切なる講話ありて會を閉ぢたのは午後十二時であつた聽衆は小學校生が約百名婦人が約百名残り百名餘は男子であつて何れも靜肅に傾聴して居つたが深刻なる印象と激動とを與ふるものがあつた事は疑はないこの二回の講演によりて祖先日蓮を有する光榮者として多大の自覺を促がすものがあつた吾等は大に勉めねばならぬ房州人は更に反省をせねばならぬ何れも相省み相勵みて大人格の靈府に入り大に進んで世界的模範として光彩を發揮せねばならぬ二十二日午前八時多數の見送りをうけて館山發の氣船に塔乘し風靜かに波穩かに都に歸つたのは午後三時である

我千葉縣が曩きに各種の方面に亘りて事業を拓き縣政の發展完備に努め特に地方改良事業に於て營々孳々と

して設備を爲しつつあるは大に吾人の意を強ふる所であるが地方改良事業が單に物質的經濟的部面のみであつて縣民精神界の訓練に及ぼす事なしとせば其は實に一大缺陷なりと謂はざるを得ない吾人は未だ此社會精神教育の方面に於て充全なる運動あるを聞かない甚だ遺憾に堪へないされば吾人は我日蓮主義の統一的大德教の力を精神の根底に與へて意義ある地方改良の發展を期せばやとをもひ一聲の流笛に送られて兩國を出發したのが二十五日午前九時半である十一時半濱野驛に着するや土木工事の行届かない爲か路のわるい縣道を車に揺られて市原郡洞井戸泰行寺に着いた村端れにて其寺の惣代人に迎へられ本堂にて國運隆昌の祈念法要を行ひ梅澤住職開會を宣し予は國民師表としての大日蓮の人格を紹介して自覺と鑽仰を促がし萩原啓門師は日蓮主義の信仰は現實と理想とを融合したる實際的信仰なる旨を説き中村乾信師は現代の欲求に應ずべき主義は公正なる日蓮上人の主張に聽くべしと誨へ聽衆の肺腑に靈化を與へて散會したるは午後五時であつた

蘇我驛より沈黙の儘本納町に着いた萩原師と共に東郷村七渡龍鑑寺に向いた神田管事其他惣代人の出迎をうけ晝餐後本堂にて國運隆昌の祈念法要を行ひ午後一時講演會を開いた予は日蓮上人の強烈なる意思の靈力を論じて日蓮主義者の活歴史を説き現代思想の指導力を有する教義は日蓮主義なる所以を論明すること二時間半に及び七里法華檀信徒の自覺を喚び起し萩原布教師は信仰の融合點を明示して熱烈なる信仰を教へ午後五時閉會を告げた午後六時半本納町草野乾燥場に於て講演會を開催し宮川師開會を宣し秋葉純一師は町村自治完成の要件を説き予は日蓮上人の雄大なる人格と卓越せる實際的教義を説いて大發心を起すべきを談じ萩原布教師は宗教は人生生活の要件にして信仰の靈光を發揮すべしと論じ午後十時會を閉じたが參聽者は終始敬虔なる態度を以て傾聴して居つたのは確かに求道熱の熾なるものあるを見ることが出来る斯くの如くにして益々修養研鑽の度を高むるならば近き將來に於て七里法華の地も靈的復活の曙光を呈するであらう

而してこの一場の講演會に於て確かに力ある訓化を賦與したるを認められた

二十六日午前九時不良少年を收容せる縣立生實學校の實況を參觀すべく名刺を通ずるや村岡校長室に案内せられ兒童の心理状態や作業や成績などに就て所見を交換し感化事業の容易ならざるを諒し校長の案内によりて各室の設備と教授上の狀況及び其家庭への通信農作などを實視し其厚意を感謝して暇を告げ歸路北生實本満寺を訪なへ正午本行寺に歸り午後一時本行寺に於て講演を開き中村布教師開會を宣し萩原布教師は日蓮主義の信仰は單未來觀にあらざ現實的にあらずして大理想の下に現實生活に意義を賦與するものなりと論じ予は現代病的思想を排して善良なる啓導を行ふには日蓮主義に憑るべしと警告を與へ聽衆の有力者はそこに一種の靈氣に感孚したるものもあつた様である午後八時より予は純善の信心を説いて本尊の意義を論じ百餘の參詣者をして隨喜渴仰を捧げしめ午後十時半閉會を告げた二十七日午前九時濱野發青切符の客となつた

二十八日午前九時本納發流車にて茂原町に着し車を僮ふて長生郡長柄村滿藏寺に向ふ途に自轉車に乗れる大津氏や紫地へ道路布教隊の文字を染め扱きたる旗を押し立てたる藤平氏に會し徐々として同寺門前に至るや寺惣代人及び管事竹内師等十數名の同僚に迎へらる午後一時大川師開會を宣し予は日蓮上人と地方改良事業と云へる課題を掲げて其意見を陳べた千葉縣は曩きに有吉知事在職當時より盛に地方改良の政令を布き教育衛生土木農事等の大改良を促がしまた一面には戸主會青年會の設立を獎勵して自治的思想を養ふものがあつたので少しく荒怠の惡習を去つて稍や清新の氣風あるに至れるやうではあるが然れども精神的自覺を喚び起して現代思想の惡傾向を排し忠實業に服すべき活ける力を與へ居るや否や予の觀察を以てせば如何に多くの會名の存するあるも未だ的確に風教の改善向上を促がすべき力あるを見出さない如何に地方改良の各事業が物質的に經濟的に形式的完備を來たしたからとて精神の根底に力ある訓化を與へずんば至誠包容の人格と進

取實行の意氣とを作り上げることは出来ない此の根底的力を養ふには大偉人の靈格に憑らねばならぬ大偉人と云つても史上に表はれたる加藤清正上杉謙信武田信玄豊臣秀吉徳川家康を云ふのではない之等の人物ては吾人の人格修養の模範として満足することが出来ない即ち靈的に力がない之を充たすには千葉縣より降誕せられたる實在せる日蓮上人を措て他に模範人格を求め出だすことは出来ない日蓮と云ふ大人物を有するは千葉縣の光榮であつて誇りである大日蓮は二十年間の研鑽を積み透明なる裁断の智力を具へ温かき美的情操濃かにして而して強烈なる意思の決行力を完備して居るので其一代六十一年間の修養活動の歴史は激潮として靈聲を放ちて居るではないか大日蓮の内包的方面は正しく絶待無限の宗教信仰によりて訓練し鍛へ上げたる靈格であつて言々句々人の肺腑を突き一舉一動人をして活動精進の氣宇を起さしむるものがある

『我弟子等我が如く正理を修行し給ひ智者學匠の身となりても地獄に墮て何の詮かある』

道念修養の珍書として拜讀して居る佐渡御書を披いた佐渡御書は文字悉く金句玉言讀み去り讀み來りて血熱し肉躍らざるを得ない『世間の淺き事には命を失へども大事の佛法などには捨つる事難し故に佛になる人はなかるべし』『心は法華經を信するが故に梵天帝釋をも猶恐しと思はず』あゝ吾人佛子たるものこの意氣信念を鍛練して國民啓導の天分を果さなければならぬ吾人智淺く識狭し然れども『日蓮が末弟は臆病にては叶ふべからず』との嚴訓を体し身輕法重の節義を持して活動せねばならぬとの念を深ふし何つの間にか兩國驛に着いたので腕車を走らして統一閣に歸りたのは午後八時十分大本尊の寶前に拜跪して身讀法華の妙行を奉告し家族に留守役の勞を謝して慰安を與へ机上に堆積せる各地よりの手紙や書類など四十餘通を整理し終りて開目抄の結文を拜讀し法悦無限の靈光に照されて不滅の生活に入らねばならぬとさらに深く自覺を開いたあゝこゝに至りて歡喜身に餘りあるを覺へ謹て合掌して唱へ奉る南無妙法蓮華經

斯かる警句教訓は今尚ほ活躍して吾人に激勵を與へ奮闘の生活を營むべきを覺らしむるので若し夫れ吾人が公正なる識見によりて之を模範として仰いて學ぶものがあるならば大日蓮の靈格に觸れて活達の英氣を享けることが出来る我縣民は悉く大日蓮を鑽仰し根本的意義を包含せる風教の改善に意を用ひて地方改良事業の完成を圖らねばならぬ苟も自治機關の當事者及び讀者が此方面に着眼し努力する所なくんば其形式が規定の型に合ふものがあつてもそれは底校けの改良に過ぎないのて何年経つても意義ある万代不朽の成績を擧げることとは出来ないと信する次いで萩原師の日蓮上人の現實と理想とを融合したる信仰の意義を説いて渴仰の道念を起すべしと教示し夕暮告ぐる鐘の響きとともに會を閉ぢた

二十九日午前九時茂原發にて大綱町に下車し實業補習學校に井口教授を訪ひ補習教育の方法成績など語り合ひて晝餐を共にし午後四時半の兩國行に乗りたが一室僅かに六名であつた予は話し相手もないのて予の常に

節 義

現代思想の病弊を矯めて適切なる啓發を與へ、有らゆる學說主張を調整統一すべき妙用を有する大道法は、日蓮主義の包容開顯の道に聽かずんば之を求め得べからざる也、苟も道を思ひ國を憂ふの志士は、日蓮主義の開顯的靈聲に耳を清めて心を洗ひ、拳々匪躬の節義を持して奮闘の歩武を進めよ、聖日蓮言はずや

又云ふ事後にあへばこそ人も信ずれ、かうただかきをきなばこそ、未來の人も智ありとはしり候はんずれ、又身輕法重死身弘法とのべて候は、身は輕ければ人は打はり惡むとも法は重ければ必ず弘むべし、法華經弘まるならば死かばね返て重かるべし

活動史

法華經は佛敎全体の理義を調整し聯合して之を綜合統一せんが爲に起れる聖敎であつて日蓮上人は紛亂せる佛敎諸宗の雜想を敎誡し指導して積極的統一を主張せられたる國家的大導師であるされば日蓮上人は一宗一派の祖師でない經典は敎團の專有でない何れも共に人類行爲の規範典則であつて亦模範として敬仰すべき完全人格である在來の敎團に因はれたる立場に於て經典を解し上人を観るならば活ける靈光に接することは出来ぬが公正の見を以て習練の存せざる意義を味ふことを得るに至らば絕對統一の妙味に感孚することを得るであらう吾等は經論釋疏の活案を下して死せる敎徒の夢を驚かし時代欲求の心の底に靈光を直射して人生の眞義を悟らしめ健全にして覺悟せる生活に樂しむべきを教ゆるので毎回の例會にはこの妙味と道を講かばやと集まるもの多く月を逐ふて盛況を呈するに至つたのは法國のため慶ばざるを得ない十一月三日午後一時統一開講會に講演と開き山根特命布敎師は聖日蓮の力の大なるを説いて其雄姿を飾れば本多總裁は「大哉日蓮主義」と題して東西兩洋の倫理學說を評敎し去りて日蓮主義の道德觀を詳説し總案は未だ嘗て聽かざる卓越せる道德論の琴線に觸れて妄想の夢を醒まし「十日」午後一時三十分記者は「國民性」と題し流麗痛快なる辯を以て國

民の表性を論じ芳賢博士の國民性十論や大隈伯の責任六種を引き來りて日蓮上人の人格より開闢を施し國民性の發露は大人格の靈力に憑るべしと結び野口日蓮主帥は紛雜せる局地的宗敎の弊害多くして効果なきを説いて人心歸趨の統一的大敎に信伏すべしと説いて國民的自覺を喚び起し「二十日」午後四時日蓮上人入試式記念大法要を行ひしが前日より吉田芳緒子家族一同は本團に來りて櫻花數百本を作りなどして清楚なる寶飾の莊嚴に盡し鏡餅菓子等を供へて丹誠の意を表し本多總裁は二十餘の僧侶を率ひ熱心なる二百餘名の參詣者に圍繞せられ證て醍醐一貫の妙味を擧げて甚大なる恩徳を證し莊嚴の法式を終りて晚餐をしたため午後六時より講演會を開き小林文學士は本誌に掲載せるが如く輕快流暢の辯を以て一時間餘の廣長舌を揮ひ本多總裁は各方面より日蓮上人の超勝的理義を説き清淨敎徒の誠意を捧ぐべしと論じ去り論じ來りて大伴人の風格を紹介し午後十時合家して散會を告げたが非常の盛況であつた

「十七日」午後二時藤井本光師は日蓮主義の作用の廣大なる六或の説を示し不新不古の大主義なる理義を明かにし井村日英師は現代虛榮の病弊を痛擊して道念の涵養を獎勵し佛敎大師の道心起すべしとの文を引いて向上菩提の念を發起すべしと教へ「二十四日」午後二時石川顯隆師は宗敎の信仰は滿足の生活を得ると共に邁進の勇氣を存する所以を説き佐川特命布敎師は信仰の妙諦と題して日蓮主義の信仰の意義より法悦の境涯を示し甚深の奧義

を得へて固き信念を起さしめ十二月一日「日」午後二時記者は日蓮主義の信仰状態に就て病的事實を指摘補論して聖訓の意義を明示し信仰に依る個人の慰安生活と團體に對する意識を述べ本多總裁は儒道の明德天道の理義を談じて宗敎的色彩を帯べるを説き日蓮主義は儒道の長所を一括して脱ける完備の主義なりと結び備極なる備者一輩をして反省せしむるものがあつたこの日開會の後長閑二三を提供せる熱誠求道の青年があつたので記者は之に對して解決を與へ歡喜の念のつから胸に充ちて相分れたる午後六時半であつた(白雲記)

▲大道會發會式「およそ寺院の存在は發露法要の爲のみならず必ずこの主義を宣得する會場として自由に使ふの爲に於ては何等の意義がない譯だ若し道の爲に使ふこととなれば佛藍は神聖であつて道場と云ふ文字が活きる事になる都における山の手方面は從來宗教敎化の設備を缺いて居つたが明治の聖世を送りて大正年間を生存するとなれば多年の夢醒めて自覺の聖靈に臨まれねばならぬ小石川原廟本念寺大須賀女遊師は温良にして護法心に厚いので嚴堂を造營して寺樓の和合見るべきものあるがこたび大道會を組織して十一月十一日發會の式を擧げ講演會を開いた記者は現代女性的の道を示し年若き婦人の心臓に反省の一矢を放ち山根日東師は死の原理より説き起して必然來るべき運命に對して用意を促がし須らく臨終の事を習ふべしと懇諭せられた聽衆は婦人が多数であつたのでかよはき小き小き胸に響い

て印象を與へた事と信ずる經文には「無有體」であるから心を致し手を盡して勵むならば有力なる結合を見るに至ることは疑はない(白雲記)

▲芥中本授寺並原琢瑞師は護法の志厚く隨力弘邁の妙行に努めつゝありしが更らに大に發展の業を積むべく講演會を開くことに盡力し十一月十四日午後一時記者は上野抄の一節を拜讀して火と水との如き信心の状態を懇説して堅實なる信仰に進むべきを教へ山根師は思慮なき成金黨の弊風に拮据を加へて滿足に充ちて勇氣ある生活を送るべしとて因縁譬驗説を以て聽衆の胸に落ちるほどに説き示された何れも眞面目に聽へて居つた事を慶ぶ(白雲記)

▲知見會 十一月十日午後二時より例會を慶印寺に開いた聽者は例月の割合には渺なく僅かに四十餘人と見受けしが眞手熱心の男女のみで圓分顯有師の「大哉山根會長の」日蓮上人の三大誓願「何れも熱烈なる信仰に住しての論議確かに少なからぬ教益を與へた事を認める

▲國別會 同月十五日例會を管福寺に催した餘りに聽衆の渺いので法會を寺主の遺慮も有るが出席講師山根日東師は能爲一人の經文に任せて佛陀論の講明を初め大聲にて熱心なる接連に門前通行の人々思はずつとひ來りて内外二十餘人を接指し得た同師の親切なる態度語調は確かに道り掛りの人々にも下種結縁を與へた事と法悦に堪へない事である

▲親善會 同廿四日の日曜を利用して本部開

管寺に開く聽衆三十餘名山根日東師の「慈悲」と題する論旨で堂々二時間の講述眞に可悅來心の起き有て薄暮光路を急ぐ善男善女の面ざし何となく喜悅の光明が輝いて居た

▲品川會況 連日七回の家庭布敎は佐川特命布敎師専らその任に當られ正法護持會の純信仰面の講演は十一月十五日妙顯寺に同交親會の講演は十一月十七日妙蓮寺に同經王會の講演は十月廿七日本光寺にあり今成 山根佐川の諸師各その特長を宣揚して隨力演說釋尊の化儀を扶け如說修行的聖訓を色顯せられたり社會布敎の養徳兒童會は日曜を利用して兒童をして一日の遊遊をなさしめ平易なる訓育談をなしてその徳性を養ふてふが同會の目的なり十二月一日午後一時開會する兒童五十名山根の阿父さんは雷おこしの題にて輕妙酒飲の訓育談をせられ佐川の阿翁さんは一鞭擊汝を玉に成すの題にて横田一龍齋の傳を證嚴沈痛に會話せられ餘興に太閤記の講談あり例によりて簡易教科書の土産を與へ午後四時散會せり

▲品川に品川は外來の信徒増加の傾向あり更になすべき事業は工場敷労働者慰安等諸々事功を擧げんとす新春の曙尤も妙法の光明により

▲椿の法益 神奈川縣橋本郡大綱村本長寺にては現任今井老師住職以來熱心なる敎化はその功を奏し寺檀和合の光明は輝き寺門の面目一新をせり十一月廿六日佐川特命布敎師が「遊き理想」の題下に日蓮の名字に聖祖の主義人格を光顯せられ夜間は編風會の爲に權講せ

られ何れもこの人生に健闘すべき意を發せり特に品川の信徒鈴木金藏氏は統一の大本尊若千を同渡尾清藏氏は小學兒童百名に繪講書を寄贈せられたり

聖祖門下例會の記
雜誌記者

日蓮主義者は雄大ななる抱負を懷いて公正なる態度を保ち登々として大義名分の下に邁進の勇猛心を振ひ起さねばならぬ從らに區々層々たる學見敎義に因はれ小人根性の感情に驅られて異体同心の嚴訓に反むく様な態度を演じてはならぬ苟も道を思ひ教を來する者は互に腹藏なく胸襟を開いて語り合ひ談じ合ひ共に手を携へて佛子たるの本領を盡さねばならぬ我聖祖門下の雜誌社が決然數百年の惡弊陋習より去つて増壁を撤し至誠水魚の思に住して事業を俱にし聯合講演會を開くこと爰に七回未だ實踐として何等の見るべきものはないが近き將來に於て我同志が正義の利劍を掲げて激烈なる折伏的戰闘を開始し天下迷妄の軍勢を斬り捲くものがあるのであらう

十一月十八日午後一時本所太町法恩寺内に津江社擔當にて講演會を開いた村西めがみ肥者開會を宜し中村めがみ記者は信仰の靈光に浴せざるものは憐むべき一輩にして劣等動物なりと斷じ小笠原活宗記者は文敎の基礎成らざる現代には日蓮主義の宣傳に力めざるべからざる所以を論じ三上統一記者は道を教重すべき理義について古來の哲匠を擧げ道と

は日蓮主義の聲に聞くべしと論斷し新南記者
開會を告げたりしが聽衆は熱烈なる高丈の氣
に擧られて過去の迷夢を醒ますものがあつ
たに相違ない午後六時より濱江社東座敷に例
月の法華會は開かれた何れも一騎當千の戰士
であるから飯むわ食ふわ談論風發教徒の意氣
精神の亡びたるを慨いて佛國の靈感を賜り會
を撤したの午後九時であつた(白雲)

加越巡教日誌

金光孝碩記

石川縣福井縣の天地に大法宣傳の任務を負ひ
たる予は丹波後町了圓寺木村義明師と共に
教團擴張の途に上る「十一月十日」午後八時京
都驛より越前今庄に向ふ午後二時今庄善勝寺
に著し午後七時法話を聞き木村師は松野抄を
拜讀して人生百歳の努力奮闘は皆成佛で最
後の目的に向て進むつゝあるものなりと述べ
予は無思抄の一節を拜讀して明治天皇の御盛
徳を稱へ奉り御佛の慈悲廣大なるを説きて彼
等の心向を測せり「十一日」今庄を發し途上三
國大日向山の諸聖連綿雲を載いて壯麗を呈し
日本アルプスの外廓かと思へば草志の隈め亦
一入の感深ふし午後三時金澤驛に着けり同
久保氏曼氏及信徒數名に迎へられて高岡町山
下旅館に入る少時休憩の間に北國新聞社吉倉
氏北味新聞社藤島氏の來訪あり談話々々天晴會
の事及び金澤支那協會當時の苦心談などに
談話は盡さず其熱誠は態度に表はれて奥床か
しとも床し「十二日」午前墨師の案内にて市中

の一部と兼六公園を遊覽せしが途上木村氏は
一句を歌ふて「來て見れば百萬石の紅葉かな」
けに面か也次いで本多町本行寺を觀察し住職
田久保師の優遇をうけ六斗林本覺寺に入る午
後三時大本尊の寶前に法味を捧げ説法の法筵
を張る木村氏は佛陀の廣大なる主師親の三徳
を稱歎し予は現代の信仰狀態を痛論して途安
の信仰を折伏し正義の信仰に入りて法悦の生
活を得べしと懇諭せられたり「十三日」晴午後
二時給寺町本長寺に於て開會木村氏は日蓮主
義の特色を擧げて國家と宗教の關係を説き予
は法華經主義の完全なるを唱導して教育の根
底を示し五時閉會を告ぐ夜間本長寺檀家惣代
三木榮松氏來訪日蓮上人研究の方法より佛陀
論に進み敬虔なる態度を以て讃仰せられたつ
あり「十四日」午前九時釜屋本成寺檀家惣代
下長松氏出迎られ墨師と共に金澤驛を發し美
川驛にて下車腕車を藉りて釜屋に着し檀家森
佐吉郎氏宅にて休憩午後三時本成寺に於て開
演墨師支那開會を宣し木村師は「信仰と安心」
とに就て平易に且つ懇切に教示せらるる夜に入
りて住職三須敬英師は説教演説は人の生活に
必要なる理由を論じ予は「此子可惡」の題下に
慈悲同情に關する種々の類例を擧げて佛の慈
悲を説明して十時閉會せり此地寺は見る處も
なき茅屋にして檀家の數僅に十七戸周圍近村
悉く眞宗のみなれば其の信仰は如何ならんと
思ひたりしに三國の例會説教に檀家は悉く
家に籠みおろし家族擧りて参詣すると云ふ有
様にて今回の如きも聽衆は我共五六六十人
過ぎざりしも若き婦人に至る迄善信品の調讀

明氏の案内にて本經寺並に顯本教會所を觀察
し橋本左内の墓に詣て回向を手向け夫より市
内及公園に散策を試み歸途新田義貞を祭れる
藤島神社に詣り風光明射を極む午後七時妙經
寺に開會墨師は「宗門の維新」木村師は「日
蓮上人の國家論」予は「我國の教」に就て熱辨
を振つて聽衆の時勢を衝けり「十八日」正後南
居より迎ひの者來りければ車を連て南居妙正
寺に向ふ「十九日」午後二時説教會を勤む聽者
百餘名夜間演說會を開く木村氏は「佛徳和合」
と題し佛法行法教法人法の顯本を論じ予は宗
祖佛陀の慈悲廣大無邊なるを説きて信仰の熱
火に油を注ぎぬ百五十餘の聽衆は今や寂滅
時にて最も熾繁なるにも拘らず平素法門を聽
くこと能はざれば機を過すべからずとて老若
男女を問はず參聽して多大の法悦充ちたるが
如し此地の信徒中山金左衛門なる者模範的の信
仰家にして近村の名物男なり又土地の青年二
十名程和誦して青年佛教會なるものを興し法
華經の研讀に餘念なき有様實に感すべき事な
りすとす「二十日」山内より開會木村師は「四時
本行寺に著し夜間説教を行ひ木村師は信仰に
入ても退せずして不退の位に居るは少く多く
は惡縁に墮かされて墮落する者なり法華信者
は此點に注意せざるべからずと教へ予は信仰
は人生に意味を與へ力を與へ最後の目的を教
るものなり又信仰は糸を染るが如きものにして
閉行修徳に依て進むものなりと説いて閉會
「二十一日」午後演說會開會木村師は自己一
人の修養と否とは家庭社會國家宇宙に向て知
何なる影響を與るものなるかを説明して信仰

の大切な所以を辨じ予は各宗の教義を論じ
て顯本法華に及び從一出多從多歸一の統一宗
教を説明して信仰意識を明かにせり夜間説教
木村師は本尊抄の本文を拜讀して妙法五字の
袋の珠は功德化の一念三千にして母の乳と成
て赤子を説ふものなりと説き予は信仰の三本
要素として第一信仰の目的第二信仰の性質第
二倍後の安心に就て丁寧懇切に教へたり此地
從來より多數の日蓮主義者を出したる丈あり
て二日間三回の演説々々とも講堂立座の餘地
もなく聽者は歡喜法悦に入り閉會を告ぐるも
尙ほ去り難き風情ありて感また深きを覺ゆ
「二十二日」午前十時信徒數名に送られて高木
に向ふ道に鯖江町を過ぎり當地の熱心なる信
徒栗野幸作氏を訪ふ喜ぶこと限りなく余等は
佛壇に法味を捧げて種々の響應を享け夕刻高
木本行寺に着し説教を行ふ住職石橋會章師法
筵を開く木村師は信解品を拜讀して長者獅子
の喻より本佛の御子なれば聽がて予は
善量品を拜讀して佛陀に對する吾人の感恩の
精神を論じ此精神と信仰喚起の基礎なりと
教へて法益を布けり此寺は僅かに十戸の檀家
なれども能く外護の本分を休して堂宇の修繕
も行届けり吾が這回の行農事多忙の際なりし
も所謂日本の宗教國史ありて此道を求め信仰
の力を得んとし集り來るもの多きは亦如何
に人々の靈的活力を養ふしつゝあるかを如何
に足る殊に何れも溢るゝ熱誠を以て吾等を
教し導するの態度は深く感誦して已まざると
共に亦各寺住職諸師が平素訓練の勞苦を思ふ
て敬意を表する所に屬す

をする」と云ふに至ては以て其熱心なる信仰の
一斑を語るべし住職三須師の宜しきに因るべ
き其夜森氏宅に宿し翌日午前十時出發小松
驛より浪車にて金津に向ふ「十五日」風雪前夜
より俄に寒さを覺へしが今は風雪烈しく手足
も凍らん計りより正午金津町妙隆寺に着し檀
家の乞ひに依て御會式法要を勤め終て直に説
教を始め木村師は波木井抄最後の御文章を拜
讀し其意義を詳説して統一的本尊に信仰を捧
ぐべしと誨へ予は撰時抄の一節を拜讀して現
代の宗教は日蓮上人の教に依ざるべからざ
ることを懇切に説明せられたり「十六日」午後
御會式法要に先代本壽院日圓德位の廿七回
忌を勤め終て法話會を開く木村師は肉休の營
養より精神の修養に及びて本尊の信仰安心を
説き金光孝碩師は本尊及び信仰の純一ならざ
るべからざる所以を熱心に辨じ終りに安國會
の本尊論を評して降壇す時に檀徒の一人安國
會の主義に心酔せる者ありて本尊問題に就て
質疑を提出せり予は懇々説論を加へ疑念を一
掃したれば彼は勿論一般信徒亦非常に喜べり
一体當地の信徒皆熱心誠實なり午後四時信
徒に送られて福井市に向ふ増田聖道師の出迎
を受けて妙經寺に入る七時半開會住職增田師
開會の辭を述べ木村氏は宗教的哲學的方面より
諸種本尊論を論じ最後に善量品の本尊論を光
顯し予は無思抄の一節によりて日蓮上人の入
格を説き其慈悲の廣大なる一代の化尊を紹介
し之皆慈悲の發現なりと論じ多大の印象を興
へたり「十七日」增田師は東西屋をして日蓮主
義演說會を廣告せしむ晝間善慶寺住職加藤智

信教總房

七里法華復活の曙光は漸く暗雲を破
つて吾人の眼界に映る様になつて
來た十一月七日山内武都福同村一ノ袋
延命寺に於て本堂車庫の修善竣工工
たれば開堂供養法會を催ふし住職鈴
木正二師導師として法式を行ひ講演
を聞いた宮川開會を述べ龜崎日蓮師は「精
神の衛生」成島布教師「宗教の過去及現在」森
川寛行師「冥想と體現」との講題にて詳々切々
信仰の本義を説いたのて教化の實を擧ぐるも
のがあつたこの日秋山吉之助なる孝徳深き一
青年八十餘歳の老嫗を背に負ふて參聽せしが
如きは特に他の注意を惹き良き教訓となつた
▲十月二十日山内武都永田光昌寺に開會聽衆は
土地の有力者多くして求道の熱あるものゝみ
小高日唱師開會を宣し木村師「吾宗徒の
覺悟」井口善叔師「道」と題して何れも學術的
に宗教的に懇説せられたのて歡喜に充ちて法
益に潤ふたのを知る
▲十一月二十三日長生野豐田村青年會は秋季
總會を開きしが木村布教師は招聘に應じて宗
教的立場より病的社會の傾向を指摘し道徳信
仰の修養洗練に努むべきを論明せられしと云
ふが宗教的信仰の眞見によりて青年の志氣を
策與するに至らば根底深き青年の結合を見る
▲同二十三日山内武都豐田村西野善立寺に講演
會を開催し鈴木住職の廣告準備道備なかりし
故農繁の期ではあるが聽者堂に滿ちるの盛況
であつた鈴木師の開會に次ぎ赤羽日輝師の所
感ありて森川布教師は信仰力の偉大なるを述

べ成島布教師は宗教と家庭教育とは融合すべし

▲十二月一日千葉郡白井村和泉光寺に講演を催ふし

信教木柵

▲十一月二十七日を以て同町明治館に於て國民教育傳教實踐講演を

約三千に及び其大の感化を興へ珠に施本とし

▲日蓮主義講演會 縣下寶積寺は新開拓地

會明地森青

大正元年十月二十六日西郷三宅に例

題下に「佛法必ず東土の本國より出べし」と

▲日蓮主義講演會 縣下寶積寺は新開拓地

信教盛岡

十一月二十三日の兩日當地法華寺

京都教報

秋は寂莫荒涼を極め人の心

時也此の期に於ける京都の日蓮主義の概況は

佛の理を時々刻々に味へ」等の文を引いて趣

天晴會教路支部講習會は十一月十六

信教阪大

天晴會大阪支部第十九例會は十一月

信教戸神

十一月二十六日午後三時神戸高等

信教路姫

天晴會教路支部講習會は十一月十六

▲地明會姫路支部一週年紀念會は昨年十月月地知名人士の婦人團體によりて組織せられ爾來一週年を経たれば今回天晴會講習會を機として本多大僧正陛下の賞賜を仰ぎ十一月十九日午前十時より同地五軒部妙立寺に於て紀念會を催せり當日會する者四十餘名又同寺主野老乾爲師を始め講習會に來れる岡山能仁寺一廣島大徳日親大徳木日種等の諸師も隨喜奉列す先づ佛前に法樂を捧げ終て幹事下江たつ子女史開會を告げ野老師登壇ありて聖語を朗讀し榎木師大徳幹事として隨喜祝辭を述べ下江幹事は謝辭を朗讀し夫れより本多上人登壇ありて「人間生活の理想」といへる題にて二時間に涉り懇切に天晴地明の意義と生活の理想を説示せられ一同法悦に住しぬかくて同寺新築會院に於て一同祝宴を賑ひ歡談如湯午後三時閉會因に同會幹事伊東てい子河内たね子安武とく子下江たつ子關たつ子及び沼部繁野等の諸子は天晴會講習會に毎夜夢馳願の熱心に研讀鑽仰せられたるは誠に奇特の事にこそ

▲姫路將校婦人會講演は十一月二十日同地會行社に於て將校婦人會あり本多日生上人の來歴を幸ひ特に同師を招聘して一場の講演を乞へり當日本多師は午後一時より會行社樓上に於て先づ御製中精神修養に關する教訓を授き約二時間の講演あり婦人に對し頗る有益なる講話として一同感喜せり

▲同月二十日午後四時より同地五軒部本宗妙善寺に於て宗祖御會式執行大導師本多管長親下寺主野口宗天妙立寺主野老僧正妙僧主高田日暢等諸師參列敷演なる法要あり終て管長

藏 金安拾錢 内山勘之助 金貳拾五錢宛
野谷清吉 内山松五郎 中村松太郎 中村徳太郎

同縣木更津成寺就檀家(第二回)

金七圓 林 貞次郎 金七圓 文野 長吉
金七圓 小川源兵衛 金七圓 伊藤香次郎
金七圓 友野 保藏 金七圓 林 長吉
金五圓 小川國太郎 金五圓 吉田松太郎
金四圓 古子田儀兵衛 金四圓 小川安太郎
金參圓 原田金太郎 金參圓 小澤 柳平
金參圓 吉田 岩吉 金參圓 伊藤庄五郎
金一圓 島對弟太郎 金一圓 網島辰五郎
金貳圓半 高山吉太郎 金貳圓半 山由太郎
金貳圓半 伊藤宗太郎 金貳圓半 島何佐和
金貳圓 吉田 かつ 金貳圓 今村 里藏
金壹圓半 鈴木實吉 金壹圓半 吉田榮藏
金壹圓 高橋 留吉 金六拾錢 内藤留吉

同縣山梨松源寺檀家

▲會員ニ入ラサルモノ

三千葉縣長生郡庄吉福莊寺檀家
金拾八圓也 山田忠司外十七名

教學財團基金受領報告

第四十四回 大正元年十一月三十日迄分

金參拾圓(一)京都府 繪大業寺住職木村日願
金貳拾圓(二)東京市淺草慶印寺住職山根日東
金貳拾圓(四)東京市淺草直交院住職田島義潤

親下の親教あり又翌二十一日午後一時より同寺に於て先師了妙院日境上人三十三回忌等の法要ありて管長陛下の親教あり頗る盛會なり

▲姫路師範學校の講演 同校長野口長太郎氏は兵庫縣下に於ける教育界の明星として夙に合名あり義に天晴會支の發起者として日蓮鑽仰の名士なるが今限に校卒業生の爲めに本多日生を聘して特に精神講話會を催せり即ち十一月二十二日午後三時午開催本多師は卒業後の心得方にて職務に對する信仰を明晰に意義せよとて道念と法悦の二點に別ちて一時同半に涉り懇切に新堂の學生當に法悦に住し道念を堅め野口校長始め教職員一同隨喜しぬ

朝倉俊達師が單騎長抄の教界に驅け廻りて敵軍を追撃し教壇擴張の爲に努力しつゝあるは屢々本誌に報ずる所なるが十一月二十三の兩日大津郡三隅村了性院に於て朝倉布教師は信仰と家庭との關係を論じ日蓮主義の修養を奨め廿日秋町妙蓮寺に開き森田林靜仰は世の善行に勵むは可なるも信仰に入りて德行を積むべしと説き坂井英俊師は日蓮主義の信仰の卓越せる所以を述べ朝倉布教師は思想統一に關する日蓮主義の立場を明かにせられたれば聽衆は一層信仰の度を高むるありしを見うけた二十三日尋常中學高等女學會當小學校の職員聯合して講演會を開き朝倉布教師は日蓮主義より觀たる釋迦觀と題して明確なる論辨を以て教育者の心靈に宗教の眞髓を

長州教報

金四圓(四) 靜岡縣見付玄妙寺住職山本通辨
金五圓(三) 神奈川縣榑本長寺檀家橫溝兵衛
金貳拾圓(五) 千葉縣益谷 行 光 寺
金貳拾圓(五) 東京淺草圓常寺檀家清水佐太郎
金參圓(三) 同 鈴木 もと
金拾圓(二) 千葉縣道元寺住職藤澤海叔
金貳拾圓(一) 同 同寺檀家 石橋 彌
金貳圓(三) 同 同 岩崎 城
金壹圓半(皆) 同縣山梨松源寺檀家 櫻井梅吉
金五拾錢(皆) 同 内原廣吉
金貳拾圓(皆) 同縣中里圓頓寺住職横山賢明
金拾圓(十) 神奈川縣大塚戸本寺檀家中
金拾圓(五) 東京駒込顯本寺檀家 小山長吉
金壹百圓(四) 千葉縣布田藥王寺住職中田日蓮
金貳拾五圓(六) 東京小石川本念寺大須賀玄繼
金拾圓(五) 東京四谷法恩寺前住 森本其良
金貳拾圓(二) 千葉縣大登萬福寺 檀家中
金拾八圓(皆) 同縣庄吉福莊寺檀家十八名
金七圓(三) 同縣東光寺住職中村會道
金六圓(三) 同縣同管泉寺住職 人
金四拾圓(四) 同縣同本寺住職藤森川會殿
金四圓(四) 同縣同 寺内 三橋むめ
金五圓(三) 神奈川縣榑本長寺檀家鈴木實藏
金貳拾圓(四) 千葉縣觀音眞禪寺 檀家中

注ぎ宗教と教育との接觸點を示されたので居並ぶ教育者は従來の態度を一變して主義鑽仰の大事なるを諒するに至つた今後の國民思想の洗練は斯かる會合を盛んならしめて是辦のない握手を爲す様にせねばならぬ

教學財團基金申込報告

第四十四回 大正元年十一月三十日迄分

▲維持會員

千葉縣長生郡關村東光寺住職 中村 會道
金六拾六圓也

明治四十一年申込分拾貳圓五拾錢ヲ取消ス

▲通常會員

千葉縣君津郡木更津成就寺檀家 川崎長之助
金拾圓 吉田 隆
同寺檀家鈴木茂藏ハ義ニ金拾五圓申込ノ處更ニ拾圓ヲ追加シタリ

▲贊助會員

千葉縣萱場本大寺檀家(第二回)

金七圓 中村 勇次 金六圓 古川 和平
金五圓 中村 儀助 金四圓 中村 直吉
金參圓佐久間源太郎 金參圓 中村吉太郎
金貳圓半 河野淺吉 金貳圓半 宇川高次郎
金壹圓半 深山敬太郎 金壹圓半 中村藤平
金壹圓半 鈴木士郎 金壹圓半 中村七郎
金壹圓 中村作太郎
金五拾錢宛 深山儀作 深山平次 森川倉次
石川文次 河野平次郎 深山得藏 深山辨

金壹圓(四) 同 同寺兼住職 齋藤義監
金貳拾圓(四) 同縣下野本泰寺住職 吉田純實
金參拾圓(二) 同縣押日 來光寺
金五拾圓(五) 同縣府前如意輪寺住井上日冲
金四拾八圓六拾一錢 同縣萱場本大寺檀家中
金九圓五拾錢 東京雜司ヶ谷本教寺檀家分
金參拾圓(追加) 千葉縣同本光寺住職中村會道

●千葉縣木更津成就寺檀家

金貳拾圓 鈴木茂藏 金九圓六拾錢 平野福
金參圓 七拾五錢 齋藤末吉(以上第二回
皆納) 金六圓(二) 大澤仁平次 金拾五圓 内
藤久平 金十圓 川崎長之助 吉田隆 金
七圓宛 林貞三郎 友野長吉 小川源兵衛
伊藤香次郎 友野保藏 林長吉 金五圓宛
香川國太郎 吉田松太郎 金四圓宛 小川安
太郎 古子田儀兵衛 金參圓宛 原田金太郎
小澤柳平 吉田岩吉 伊藤庄五郎 島何才
太師 網島辰五郎 金貳圓半 高山吉太郎
山由太郎 伊藤宗太郎 島何佐和 金貳圓
宛 吉田かつ 今村里藏 金壹圓半 鈴木
實吉 吉田榮藏 金壹圓 高橋留吉 金六十
錢 内藤留吉(以上一時完納)

●岡山縣和氣本成寺檀家

金十一圓 秋山泰三 金十圓宛 増赤庄吉
藤本吉松 金七圓 恒次徳次郎 金四圓八十
錢 藤本達次郎 金四圓 岸本龜次郎 金二
圓半 藤本太郎 須波松松 金二圓宛
松本辨造 藤原勇三郎 一圓六十錢 岡本久
次郎 三圓十四錢宛 日笠藩平 川口品造

一圓十錢 岡本善四郎 一圓廿錢 恒次
 利平 安東常次郎 從野元吉 一圓十錢 從
 野橋太郎 一圓宛 右野吉次郎 從野秋次郎
 岡本谷五郎 八十錢宛 日笠岡五郎 從野
 五郎 五十錢宛 阿部房治 高瀬三郎 岡
 本新三郎 尾崎喜八 藤原光造 岡崎金五郎
 義光俊二 四十錢宛 大野吉五郎 浦上興利
 岡崎三三 須波廣吉 從野百三 永井謙忍
 三十錢宛 從野早吉 松本初次郎 岡崎房三
 二圓四十九錢 巖谷平外十四名(以上第五
 回完納) 五圓 高山藤吉 三圓 内田吉太
 郎 二圓 長谷川久造 九十錢 小林吉松
 八十錢宛 延原彌三吉 松本林藏 四十錢
 黒田卯三郎(以上第四回) 一圓八十錢 安東
 勝治 十錢 黒田良吉(以上第三回)

●千葉縣榎戸新藏寺檀家

金一圓四十錢宛 三須吉松(三) 齊藤源次郎
 井野寅松 井野久五郎 井野利惣治 中島
 藤太郎 井野佐吉 山本久藏 押尾佐太郎
 山本辨次郎 山本與次右衛門 岡田久松 三
 須榮助 京增藤次郎 三須大司 京增覺次郎
 押尾幸次郎 六十錢宛 井野圓次郎 齊藤
 進酒藏 三須太平治 山本榮吉 三須藤太郎
 平井藤三郎 岩崎政吉 四十錢宛 三須哲
 之助 小川新右衛門 小川初太郎 小川倉藏
 山本榮太郎 三須竹次郎 廣菊次郎 淺羽三
 之助 齊藤繁藏 多十錢宛 中島大次郎 今
 井定吉 鈴木乙次郎 鈴木卯太郎 四圓六錢
 内田又兵衛外十九名(以上第三回)

●同縣同 同寺檀家

金一圓四十錢宛 三須吉松(三) 齊藤源次郎
 井野寅松 井野久五郎 井野利惣治 中島
 藤太郎 井野佐吉 山本久藏 押尾佐太郎
 山本辨次郎 山本與次右衛門 岡田久松 三
 須榮助 京增藤次郎 三須大司 京增覺次郎
 押尾幸次郎 六十錢宛 井野圓次郎 齊藤
 進酒藏 三須太平治 山本榮吉 三須藤太郎
 平井藤三郎 岩崎政吉 四十錢宛 三須哲
 之助 井川新右衛門 小川初太郎 小川倉藏
 山本榮太郎 三須辨次郎 廣菊次郎 淺羽三
 之助 齊藤繁藏 多十錢宛 中島大次郎 今
 井定吉 鈴木乙次郎 鈴木卯太郎 四圓六錢
 内田又兵衛外十九名(以上第四回)

●同縣開本法寺檀家

金二圓宛 大多和マヌ 大多和淺治郎 大多
 和良八 田邊金之助 向七十郎 細谷彌吉
 細谷榮之助 金一圓八十錢宛 御園村右衛門
 大多和圓左衛門 金一圓六十錢 阿曾和助
 金一圓二十錢宛 田邊賢司 田邊定一郎 宗
 島忠平 金一圓宛 田邊源次郎 小高治右衛門
 齊藤四郎 八十錢宛 河野はつ 板倉忠太
 郎 大多和德藏 野口源之助 北田文藏 兼
 島映助 諸岡源藏 田邊秀三郎 六十錢宛
 片岡久八 北田重左衛門 四十錢宛 板倉爲
 次郎 大多和伊十郎 大多和吉藏 河野留三
 郎 野口三藏 小野善久 渡邊文左衛門 北
 田祐藏 今關庄作 木島健治郎 片岡幸三郎
 片岡爲吉 藤川三吉 三十錢宛 河野松次
 郎 大多和直 一圓十九錢 板倉由藏外九名
 (以上四、五回分)

●同縣同東光寺檀家

金一圓二十錢 高山政吉 金六十錢宛 大和
 田助太郎 高山徳次郎 三十錢宛 高山金藏
 高山喜次郎 高山竹松 高山濃藏(以上三、
 四、五回)

●神奈川縣飯田本與寺檀家

金六圓宛 美濃口源左衛門 青木浦次郎 金
 三圓宛 保田喜助 保田圓吉 保田徳藏 石
 川仁太郎 三橋金太郎 金二圓宛 遠藤幸助
 遠藤金藏 右川吹治郎 三橋伴藏 保田竹
 治郎 梅澤藤吉 石井八重藏 金一圓宛 保
 田太郎 保田庄藏 三橋伊三郎 金一圓六十
 錢 石川源右衛門 六十錢宛 遠藤信松 三
 橋忠藏 保田平藏 五十錢宛 保田伊五郎
 保田清藏 遠藤直治郎 四十錢宛 遠藤浪五
 郎 小袋久藏 村田利之助 保田清太郎 保
 田圓藏 保田幸八 三十錢宛 保田太四郎
 保田伴藏 二圓保田榮太郎外九名

●千葉縣北生實本満寺檀家

金四圓今井喜代太 金二圓四十錢宛 森田庄
 太郎 今井善一郎 森田三 金二圓宛 森文
 太郎 森田七藏 金一圓六十五錢 篠崎七重
 郎 金一圓六十錢 森田佐七郎 一圓四十錢
 宇野澤半七 金一圓 三枝重郎 七十錢宛
 中村平七郎 内山忠吉 篠崎幸福 丸島利助
 篠崎長吉 鋪木與市 角田市右衛門 吹野彦
 治郎 大堀松五郎 小澤健一 六十錢宛 森
 田幸三郎 同人 森田徳藏 五十錢 三枝八
 十次 四十錢宛 稻生善三郎 角川喜三郎

今井造作 森田忠助 池田榮太郎 森富藏
 森田文吉 窪田清市 今井幸次郎 渡邊久藏
 今井七太郎 鈴木龜藏 森田太郎 石田權
 右衛門 山崎文平 吹野佐右衛門 三十二錢
 宛 稻生常吉 秋元貞吉 内久 之助 篠崎
 善藏 吉野辰五郎 中村重三郎 岩田千藏
 錦織作次郎 秋元製鞍吉 三十錢宛 野中市
 藏 今井清藏 野中仁太郎 山本彌兵衛 池
 田市三郎 野中七藏 三枝藤造 伊藤幸次郎
 今井平吉 山崎金一郎 三橋甚七郎 三枝
 喜惣次 三枝善五郎 森田廣 池田寅吉 井
 谷國太郎 鈴木祐藏 十一圓十錢 松田七十
 七外六十六名(第一、二、三回)

正誤 第四十三回報告中千葉縣松之郷本松
 寺檀家金六圓猪野三郎右衛門へ金八圓ノ誤
 同報告中(金六圓並木一郎)ヲ追加ス
 第四十二回報告中金五圓神奈川縣榎本長寺
 檀家中トアルハ寺ノ家鈴木寅藏ノ誤ニ付訂
 正ス

日 叢 注 義 の 雲 氷

候 間 御 拂 込 被 下 度 此 段 虔 告 候 也

本 誌 講 讀 料 は 本 月 中 集 金 郵 便 に よ り 領 收 方 手 續 可 致

虔 告

統 一 團

新年施本教書の出版 廣告

十二月十日迄の申込に限百部以上特價一部壹錢宛

新年の教全 定價一部以上一部 五十部以上一部 壹錢五厘

○希望と力 文學士 小林一 郎先生

○現代と日蓮主義 高島平三 郎先生

○伽藍 孤の説法 柴田 其 年 師

生活の價值 全 定價及表装前同斷

十二月十日迄の申込に限百部以上特價一部壹錢
内容 小林文學士が例の關平易の筆にて人生の生活と日蓮主義の交渉を説きたるもの△四六半裁二十二頁表紙石版摺り

一 大事因縁 全 定價一部以上一部 五十部以上一部 壹錢五厘

立正安國 全 定價一部以上一部 五十部以上一部 壹錢五厘

(石版五度摺彩色刷。美本)

此の二書は日蓮聖人崇拜者として有名なる海軍大佐子爵小笠原長左衛門下球に本社爲め日蓮主義の信傳を以て國家主義忠孝中心の注意を記述したるものにして軍人青年、文士等あつても必讀の文字なり

發行所 山梨縣中巨摩郡小井川

天鼓雜誌社

送金は惣て振替口座東京二〇八五番に願ひたし

日蓮主義の靈光
定價一部 參 錢(郵税二 錢)
廿部以上五十部迄一部 貳錢(郵税八 錢)
百部以上一部 壹錢(郵税十六 錢)

大正新年には舊來の習慣である砂糖や海苔や手拭などを贈答して意味の少ない虚禮を行ふべきでない、互に有意義の新春を迎ひて精神を洗練し先りある理想の生活を送るべきである本書は心理學の泰斗高島先生美術家竹内先生及三上統一記者の講演を輯めたるもので日蓮主義の概要を知る事が出来る而かも其價が非常安い新年に酒を買ふて酔ふよりも本書を知人に送るて日蓮主義を味識せしむるあらば其徳甚し大なるものである故て爰に新年の施本用として本書を薦む

發行所 東京

統一 團

(振替口座東京二〇八九番)

宮殿●須彌段

前机●幢幡

大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度は是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候



三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども此の類は有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛具此の類は有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛具此の類は有之候を以て一々記載する能はず

- 佛具一切 過去帳類 ●大般若經 ●一切經疏 ●理趣分 ●位牌 ●太鼓
- 佛具金物 ●切金細工 ●佛手 ●佛眼 ●佛心 ●佛足 ●佛髮 ●佛乳
- 佛具彫刻 ●佛尊 ●佛塔 ●佛龕 ●佛壇 ●佛座 ●佛床 ●佛几 ●佛桌
- 佛具文庫 ●佛經架 ●佛經箱 ●佛經函 ●佛經櫃 ●佛經籠 ●佛經袋
- 佛具香具 ●佛香爐 ●佛香几 ●佛香筒 ●佛香瓶 ●佛香燭 ●佛香燈
- 佛具淨器 ●佛水盥 ●佛水注 ●佛水筒 ●佛水罈 ●佛水鉢 ●佛水杓
- 佛具文房 ●佛硯石 ●佛硯匣 ●佛硯架 ●佛硯函 ●佛硯籠 ●佛硯袋
- 佛具雜物 ●佛掛軸 ●佛軸套 ●佛掛屏 ●佛掛卷 ●佛掛幀 ●佛掛軸
- 佛具坐具 ●佛蒲團 ●佛蒲團套 ●佛蒲團架 ●佛蒲團函 ●佛蒲團籠 ●佛蒲團袋
- 佛具其他 ●佛手鏡 ●佛手帕 ●佛手巾 ●佛手布 ●佛手紙 ●佛手扇

佛具卸部

京都市三條 木舖 三法堂藤田總次

小賣部

同市三條 通大阪西入 三法堂佛具陳列場

大僧正本多日生現下著

橘香集

殘本數十部あり御入用のものは至急申込あれ

統一大本尊

紺紙金泥一幅
郵税共金拾錢

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ月前金七十
壹錢 代金ハ振替貯金口座東京二二一九番へ拂込マレタレ此處
合ニハ送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

大正元年十二月十五日印刷發行

發行人 井村日成

編輯人 山根日東

印刷人 鈴木日雄

發行所 統一團
東京市淺草區北清島町十四番地

● **新 ら し き** (特に新らしきと云ふ!!!) **御傳** 出づ ●

發賣所 東京市本所區綠町四ノ卅一 (妹尾資) 凌雲堂

京都深草妹尾資英社
日蓮聖人御傳
 通俗精神教育會 妹尾 凌雲謹著
 日蓮聖人御傳專講 宇都宮主計之介謹講
 新編統一節創始者

著者聖人の威靈に感孚して茲に年あり曩きに身を藝界に投じて以て其偉大なる御人格の宣傳に力む即ち本書は著者が多年研鑽洗練の功を積み字都宮主計之介として謹講したる御傳を其儘上梓したるもの史實正整情味津津々久遠劫來第四の讀みもの也

内容
 ▲牛立▲安房の國妙の講願▲清澄寺師弟の別れ▲小町ヶ辻瓦石の雨▲名越の庵至秋の一夜▲荏原の郷夏の日▲鎌倉殿中血染の一卷▲松葉ヶ谷煙の渦▲由比ヶ濱師弟の別れ▲伊豆の海天の浮舟▲船守彌三郎夫婦の赤心▲最明寺入道時頼の遊歴▲小松原血潮の海(其一) (其二)▲岩高山譽の頭巾▲蒙古の國書▲富士の嶺▲良觀の雨乞▲死罪の下知狀▲記念の五の巻▲龍の口夜半の太刀風▲依智の郷情の玉章▲佐渡ヶ島雪の塚原(其一)(其二)▲赦免狀▲時宗對面以下購入減迄

正 價 金 壹 圓 貳 拾 錢 (小包郵送料壹冊ニ付金八錢)
特 價 金 壹 圓 (小包料ハ弊堂ニテ負擔ノ事)

▲特 價 期 間 大正元年十二月一日より同三十日まで
 發賣所 東京市淺草區北清島町十四 (振替東京) 統一團

● **特 價** 限 部 千 に 發 以 日 廿 一 年 正 に 既 部 千 の 豫
 供 右 て を 價 特 限 部 千 に 發 以 日 廿 一 年 正 に 既 部 千 の 豫
 す に 坐 以 價 特 限 部 千 に 發 以 日 廿 一 年 正 に 既 部 千 の 豫